

---

# 銀の月と銅の星

かぜのあけち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀の月と銅の星

### 【Nコード】

N4010X

### 【作者名】

かぜのあけち

### 【あらすじ】

門外顧問組織に所属するオレガノ。

彼女が世話になっていたある組織が何者かによって壊滅した。その原因をさぐりにバジルと共に向かった並盛町で知った真実とは…。以前、GREEにのせたものです。

## ブローグ

並盛商店街の中に、小さなイタリア料理店がある。

灯りを押さえた落ち着いた店内は夜という時間と相成って恋人達が多く見受けられた。

その店内の奥、シャマルが黒岩と向かい合わせに座っていた。

二人とも、ここへ入って注文してから何一つ話そうともしない。

しばらくして、店員がシャマルにコーヒーを、黒岩にオレンジジュースを置いて立ち去ると、シャマルがスーツの内ポケットから煙草を取り出した。

「シャマル」

黒岩が顔をしかめてテーブルをトントン、と叩く。

テーブルには「禁煙」の文字と煙草の絵に斜線の引かれたピクトグラムの描かれた小さなボードが貼ってあった。

そのボードを一瞥してため息をつく、シャマルは取り出した煙草をしまった。

「俺に煙草をやめろっていいのか」

「あら、その方が健康のためにも良いわよ。仮にも医者なのでしょう」

くすくす笑う黒岩に渋い顔を向けながらシャマルはため息ひとつついた。

「ごめんなさいね」

オレンジジュースにストローを差しながら笑っていた黒岩が不意に真面目な顔になる。

「本当はもっと大事な話をするために私を呼んだのでしょうか」

「ああ」

目の前のコーヒーを少しずらしてシャマルは話し始めた。

「正直、平和に暮らしているお前達に頼むのは俺としても気が引ける。だから、断るなら今のうちだぞ」

「聞く前から断るの？」

「聞いたらきつと断れなくなると思ったからな」

黒岩がシャマルの顔をじつと見ている。それから、ストローでオレンジジュースをかき回しながら言った。

「私に頼み事をするなんて、よっぽどの事なのでしょう。なら、断る理由はないわ。」

話してもらえるかしら」

「すまないな」

そう前置きをして、シャマルは言った。

「ダフネ・ノーチエを預かってほしい」

黒岩のストローを持つ手が止まった。

「ダフネが生きていたのですか？」

シャルマルに訪ねる声が心なしか震えている。

「見つかったのはつい先日のだ。俺も彼女に会うまでは生きているなんて知らなかった。

ただ、見つかったのはいいんだが、彼女自身精神的ダメージが強すぎてまともに話が出来る状態ではないんだ。

だから、彼女が落ち着くまでお前の方で預かってほしい」

しばらくの沈黙。

黒岩が持っていたストローから手を離れた。

カラン、とグラスの中で氷が音を立てる。

「本当は他の手を考えたかったが、彼女の状態を考えたら昔面倒を見ていたお前に預けるのが一番だと思ってな」

「…ありがとう」

黒岩が笑う。その笑顔がどこなく寂しそうなのをシャルは見逃さなかった。

「すまない。だが、お前達の事は俺がこの身に代えても守る。なるべく今の生活を壊さない様にやってみるつもりだ」

「心配しないで。私も子供達もそれなりの覚悟は出来ているから。それに、ダフネが生きていたのですもの、夢幻もきつと喜ぶわ」

そう言つてグラスを手に取るとストローに口をつけた。

シャルもそれに習い、冷めかけたコーヒーを何も入れずに一口飲んだ。「明日彼女に会わせる。何だったら子供達も一緒に連れて来ていいぞ。とりあえず、礼代わりに今晚俺と付き合わないか」

「どさくさに紛れて私を口説くつもり？」

「俺はいつでも本気だぞ」

「……知ってる。十年来の付き合いだから」

シャルが怪訝な顔で黒岩を見た。  
いつもなら、

「こんな年増を口説いて」

そう言つては笑うはずの彼女だったからだ。

そんな彼を見て、黒岩は言った。

「今日は付き合っわ」

予想外のその言葉にシャルが呆けている。  
そんな姿を見て、黒岩は口元を押さえて笑ったのだった。

## プロローグ 2

並盛中の屋上で、落下防止のフェンスに寄りかかって夢幻は何も考えずとなく空を見ていた。

（空が高いなあ）

昼休みの屋上、そろそろ午後の授業が始まるせいか、人影はない。

教室で一緒に昼食を取る友人のいない夢幻は昼休みになると必ずここに来て一人で食事をしている。

彼女自身、人が嫌いと言う訳ではない。時々ではあるが、彼女を誘ってくれる人もいる。

ただ一人の方が気が楽、それだけなのだ。

そろそろ戻ろう、そう思って足元にあった空の弁当箱を拾って歩き出そうとしたその時だった。

人気がない屋上に、歌声が聞こえてきたのだ。

どこから聞こえて来るのだろうか、そう思って夢幻が辺りを見回すと、少し離れた所、フェンスの上に一羽の黄色い小鳥が止まっていた。

歌声はそこから聞こえてくる。

どこかで聞いた曲だな、そう思って口ずさんでみて思い出した。



（なるほど、校歌ですか）

黄色い小鳥が並盛中校歌を歌っていたのだ。

その見事な歌い方に、夢幻は感心した。

それにしても、と校歌をさえずっている小鳥を見ながら夢幻は思った。

一体誰がこの黄色い小鳥に校歌を教えたのだろう。これだけ歌えると言う事は何度も歌っているか、聞いているに違いない。

そんな事を思いながら小鳥を見ているうちに、いつの間にか夢幻自身も小鳥と一緒に歌っていた事に気がついた。

一通り歌い終わって黄色い小鳥がパタパタと飛び去っていく。その小鳥を見送って夢幻もまた、教室へと戻っていった。

その次の日。

いつもの様に、屋上にあがると、珍しく人の姿がない。

弁当片手にキョロキョロと辺りを見回してなるほど、と夢幻は納得した。

フェンスに寄りかかって空を見上げている少年の姿があったからだ。

（確か、この学校の風紀委員長だった様な）

この学校に入学して間もない夢幻でも彼の事は噂に聞いていた。

並盛中風紀委員長、雲雀恭弥。

生徒はもちろんの事、先生でさえも彼には逆らえないと言われている。

裏で不良を束ねているとも、気に入らない人間は再起不能にしてしまつとも噂されていた。

そんな彼だけに、誰も関わりたくないのだろう。

彼から少し離れた所に座り、夢幻は弁当を広げて食べ始めた。

食べながら空を見ると、昨日同様、空が高い。

程なく弁当を食べ終え、空になった弁当箱を包むと、それを待つていたかの様に、昨日の黄色い小鳥が夢幻の側のフェンスに舞い降りてきた。

それから、夢幻を見て首を傾げるとお得意の並盛中校歌を歌い始めたのだ。

そんな小鳥に、夢幻はすまなそうに言った。

「今日はごめんね、一緒に歌えないの。その代わり、君の歌を聞かせてくれるかな？」

夢幻の言葉に、小鳥のさえずりが止まった。夢幻を見てまた少し首を傾げ、パタパタと飛び立っていった。

悪い事をしたかな、そう思いつつ夢幻もまた立ち上がり、屋上を後

にしようとしたその時だった。

不意に、背筋が凍りつく様な気配を感じたのだ。

それなりの場数を踏んでいる夢幻にとって、それが殺気だと感じるのにももの数秒とはかからなかった。

その気配に、夢幻が振り返る。

振り返った先、眠っているのか目を瞑ってフェンスに寄りかかっている雲雀の姿があるだけだ。

（今の、なんだったのだろう）

あれだけの殺気は夢幻も感じた事はなかった。

いぶかしみながらも、夢幻は屋上を後にした。

その日の放課後。

人気のなくなった学校の屋上に夢幻は上がって来ると、キョロキョロと辺りを見回した。

「やっぱり、来てないよね」

黄色い小鳥が来てないか見に来ていたのだ。

もしかしたら、一緒に歌いたがっていたのだろうか、そう思ってこ

ここにきたのだ。

もちろん、それは夢幻の勝手な想像であって、実際はそうでもないかもしれない。

たかが小鳥なのに、どうしてここまで気を使うのだろうかと思いつつ、そんな自分に夢幻は笑った。

落下防止フェンスから街の景色を見ると、夕暮れの街並みがよく見える。どこからか聞こえて来る「夕焼けこやけ」のチャイムを聞きながらそんな街並みを見ていたその時だった。

パタパタ、と聞きなれた羽音が聞こえてきたのだ。

その音を頼りにフェンスの上を見ると、あの黄色い小鳥が止まって夢幻を見ている。

「さつきはごめんね」

フェンスに止まっている黄色い小鳥を見上げながら夢幻は言った。

「君に言ってもわからないかも知れないけど、私、人前で歌うの駄目なんだ。」

だから、周りに人がいない時に一緒に歌ってあげる」

黄色い小鳥が首をかしげて夢幻を見ている。

わかってくれたかな、そう思いながら黄色い小鳥を見ると、その小鳥が校歌を歌い始めた。

一通り、一番を歌ったところで夢幻を見る。

やはり、一緒に歌ってほしいのだろうか。

「よし、日が沈むまで歌おう」

そう黄色い小鳥に話しかけると、夢幻も一緒になって歌い始めた。

それから毎日、放課後になると夢幻は屋上へと行く様になった。

屋上に上がると、まず、黄色い小鳥を探す。そして、その姿を見つけると一緒になって校歌を歌うのだった。

そんなある日。

いつもの様に歌っていると、不意に小鳥が歌うのを止めてパタパタと飛び立って行く。

小鳥の飛び立った先を見ると、屋上の入り口に雲雀の姿が見えた。

不機嫌そうな雲雀のその肩に黄色い小鳥は悠々と止まると、のんびりと毛繕いを始めた。

同時に、夢幻はまたあの殺気を感じていた。

まただ、と夢幻は思った。

この屋上にいるのは夢幻以外は入り口にいる雲雀ただひとり。

と、言うことはこのピリピリ来る殺気は間違いなく雲雀から来てい

るのだろう。

夢幻がわからなかったのは、どうしてその殺気が自分に向けられているのか、と言う事だった。

まだ数えるほどしか会っていない彼に殺気を向けられる理由がわからなかったのだ。

その雲雀が、夢幻の前に来て、言った。

「君、歌わないの?」

何の事かわからずきょとん、としている夢幻に、雲雀はもう一度言った。

「歌わないの?」

不機嫌そうに言う雲雀を見ながら何を、と聞こうとして不意に思い当たった。

「もしかして、校歌を?」

黄色い小鳥が雲雀になついている所を見ると、もしかしたらこの小鳥に並盛中校歌を聞かせているか、あるいは教えているのは間違はなく雲雀なのだろう。そして、夢幻が小鳥と一緒に歌っているのを何処かで聞いていたに違いない。

歌わないとどうなるか。そう思いつつ、夢幻は雲雀を見て言った。

「私、人前で歌おうとすると声が出なくなるの。だから悪いけど、

あなたの前では歌えない」

本当の事だった。

夢幻自体、歌を歌うのは大好きで小さい頃は人前でよく仲のいい友達と一緒に歌っていた。

それが出来なくなったのは一緒に歌った事でその友達を不幸にしまったから。

「そう言う訳で、私達の邪魔はしないでくれる？」

殺気を無視して雲雀の横を通り過ぎ、夢幻は屋上を後にした。

雲雀もまた、そんな夢幻の後ろ姿をただ黙って見送った。

それからだった。

夢幻が屋上に上がって小鳥と歌っている時、雲雀が屋上に来る事はなかった。

ところが、夢幻が用事などで屋上に来られない次の日の昼休み、まるで夢幻が来るのを待っていたかの様に雲雀がそこにいて、

「今日は歌わないの」

と、聞いてくるのだ。

そのくせ、夢幻の返事を待たずにいなくなってしまう。

（一体、何なのやら…）

でも、と夢幻は思う。

もしかして気を使っているつもりなのだろうか。

それとも、ただ歌が聞きたくて催促しているのだろうか。

どちらにしても、こっちの事情なんて考えていないんだろうな、そう思いながらもなるべく時間の許す限り、屋上へと上がるのだった。

そんなある日。

夢幻が家の用事で早く帰らないといけなかったため、その日は屋上へと行かず、まっすぐ校門へと向かっていた。

そんな夢幻を呼び止める者があった。

「お前だな、風紀委員長の前で歌わない生意気な女は」

その声に、夢幻が振り返った。

数人もの学生服の男達が夢幻を睨み付けている。その腕には「風紀」の腕章がこれ見よがしに付けられていた。その一人が夢幻の前に立ち、睨み付ける。

「痛い目に合いたくなければ、大人しく言う事を聞くんだな」

「大人しく？」



「委員長の前で歌えばいい事だ」

いつの間にか夢幻の回りには彼らを取り囲んでいる。そのただならない雰囲気、他の生徒達はただこの様子を遠巻きに見ているだけだ。

「こっちは急いでいるの。どいてくれる？」

夢幻も負けてはいない。目の前にいる男の一人を睨み付け、その脇をすり抜けようとする。

その前を、男が数人立ちふさがった。

「一つ聞きたいんだけど」

なるべく冷静さを保ちつつ、夢幻は聞いた。

「これって、あなた方の言う風紀委員長があなた方に頼んだ事なのかしら」

「お前が知らなくてもいい事だ」

「て、事は雲雀さんは知らないのね」

もし雲雀が彼らに命令したのなら夢幻は彼に対して失望していただろう。それに、もしこんな事を命令するのなら夢幻が屋上で彼の前で歌うのを断った時点でやっているはずだった。

言う事を聞かない、なんてのはただの言い訳なのだろう。ただ、目の前の人間が思い通りにならないのが気に入らないだけに違いはない。

そう考えたら夢幻を取り囲んでいる男達に腹が立った。

ブレザーの内ポケットに手を入れると、そこから愛用の武器、鉄扇を取り出した。

「あなた方が力づくで私を連れて行こうと言うのならこっちもそれ相応の事をしますよ」

男達に戸惑いを含んだざわめきが広がる。まさか、目の前の女子生徒が武器を手には抗するとは思っても見なかったからだろう。

一触即発の雰囲気、この様子を遠巻きに見ていた生徒達も固唾を飲んで見守っている。

先に動いたのは相手の方だった。

男のひとりが夢幻に飛びかかってきたのだ。

男の手が伸びて夢幻の胸ぐらに掴みかかるようにする。

その手がブレザーの襟を掴む寸前、夢幻は軽く後ろに避けて男の手を思いつきり持っていた鉄扇で弾いた。

男が打たれた手を押さえてうずくまる。

同時に、周りにいた男達が色めきたった。口々に叫んでいる。

「大丈夫か!!」

「あの女、下手に出ればつけあがりやがって!!」

「もう容赦しねえ!!」

そんな男達を見ながら夢幻もまた鉄扇を構えた。

ひと悶着ありそうなこの光景を誰もが固唾を飲んで見守っていたその時。

「お前ら、何やっているんだ!!」

不意に、男達の後ろで怒号が飛んだ。

男達の姿に隠れて声の主は見えない。しかし、男達の間一種の緊縛感が漂っている。

もしかしたら彼らより偉い人なのだろうか。

夢幻がそう考えているうちに、男達の間からひとりの男性が現れた。髪をリーゼントにしてこの学校の物ではない学ランを着ている。その姿は一昔前の番長と言ったところだろうか。

彼を見て男達が口々に「草壁さん」とつぶやいている。

その草壁が男達を睨みつつ、静かな声で言った。

「お前達、何をしている」

「草壁さん、実はこの女があまりにも生意気なものでちょっと締め上げるつもりでした」

「誰がそんな許可を出した？それに、今のお前達はそんな事をして  
いる場合ではないだろう」

静かな声だが、その声には逆らえない何かを夢幻は感じた。

その言葉に、男達が一斉に直立不動の体制を取り、

「申し訳ありませんでした！」

草壁に向かって頭を下げた。

男達が校舎へと去っていくと同時に、遠巻きに見ていた生徒達も安心半分、残念半分で蜘蛛の子を散らしたかの様にいなくなっていた。

周りに人がいなくなったのを確認して、草壁が夢幻に頭を下げた。

「申し訳ありません。自分がいながらあなたを危ない目にあわせて  
しまいました」

「別に、あなたが謝らなくてもいいのでは」

「いえ。あの者達の不始末は自分の責任でもあります」

「こっちは構わないわよ。売られた喧嘩は買うだけだから」

その答えに、草壁はただ困った様な笑いを浮かべるだけだった。

それからしばらく、草壁の姿を校内のあちこちで見かける様になった。

放課後屋上に上がる時。

家の用事で早く帰らないといけない時。

さりげなく彼の姿を見る様になった。

そのせいだろうか、夢幻に喧嘩を仕掛けた風紀委員の男達の姿を見る事がなくなった。

初めは少し迷惑だと思っていた夢幻だったが、その草壁の様子を見ているうちに、何となく彼の人となりがわかり始めてきた。

何しろ、その現れ方が本当にさりげなく、夢幻の行動を妨げていないのだ。

見た目と違って案外繊細なところがあるのだろう。

半ば迷惑ながらも、そんな彼を視線の片隅で追いかけていた自分に、夢幻は少し笑った。

そんな日々が一週間も続いた頃、夢幻は思いきって草壁を屋上へと呼んだ。

「風紀委員副委員長の草壁さん、もう私の護衛はいりませんよ」

目の前にいる彼が風紀委員副委員長の草壁だと夢幻が知ったのはつい二、三日前の事だった。あの時、彼がなぜ夢幻に謝ったのかわからなくて彼女自ら調べたのだ。

「ところで、私の護衛つて、雲雀さんに頼まれた事なのかな？」

「いえ、自分が勝手にした事です。あなたが歌う校歌は委員長のお気に入りなものですから」

やっぱり、と夢幻はつぶやいた。

同時に、こんないい人を従えている雲雀を少し羨ましくも思った。

「まあ、そんな事だろうとは思っていたけどね」

それから、草壁を見て言った。

「『迷惑でなければ、今度デートしてもらえませんか』」

## 留学生バジル

空を見ながらバジルは額の汗を袖でぬぐった。それから、手に持った木の桶を地面に置くと柄杓で水を撒き始めた。

イタリアの郊外、ボンゴレファミリーが所有する別荘のひとつに日本家屋風の屋敷がある。

ファミリーが所有している別荘の中では比較的小さい方だと言われているものの、その広さはその辺りに建っている別荘とは比べ物にならない位見事なものだ。

平屋立ての屋敷は畳の敷かれた部屋がいくつもあり、先日畳を入れ換えたのだろう、い草の気持ちいい香りが漂っている。

部屋にはそれぞれ庭がついていて、あるところには大きな錦鯉のいる池がついていたり、またあるところには大きな桜の木があったりと、それぞれ日本をテーマにした庭になっていた。

その別荘の入り口でバジルは何するとなく打ち水をしていたのだった。

この暑さでは打ち水をしてもしそんなに涼しくはならないかもしれない、そんな事を考えながら水を撒いているバジルに声をかける者があった。

「精が出るわね、バジル」

「お疲れ様です」

バジルに声をかけたのは同じ組織の仲間であるオレガノだった。ス  
ーツに身を包んでいるものの、バジルほど汗はかいていない。

「親方様はいらっしゃるかしら」

「先程帰って来ました。オレガノが帰って来たらすぐ来る様に言っ  
てました」

「わかったわ。そうね、もしかしたらバジルにも手伝ってもらつか  
もしれない」

また後で、そう言う中へと入って行った。

オレガノの言葉を気にしつつ、桶を持って残りの水を全て撒き終え  
ると、中へと入って行く。

日差しの遮られた室内は外より幾分かは涼しい。

入り口のホールを抜け、奥に入ると、小さな土間に出る。そこに桶  
と柄杓を置いて手を洗っていると、程なくオレガノが入って来た。

「親方様がお呼びよ。やっぱりあなたにも手伝ってほしいみたい」

「わかりました。すぐ行きます」

奥にひととき大きな和室がある。

十畳ほどの大きさのそこは枯山水の庭園があり、わびさびの趣をか  
もし出している。

入り口で靴を脱いで上がると、親方様こと沢田家光が待っていた。



そして、バジルが家光の前に来て正座するのを見ながら話を切り出した。

「早速だが、オレガノと一緒に並盛町に行ってほしい」

「並盛町ですか」

並盛町と言えば、ボンゴレファミリー十代目であるツナこと沢田綱吉が住んでいる町だ。

「沢田殿の身に何かあったのですか」

「まだそこまでは行っていない。ただ、その可能性も否定出来ないかな。そこで、オレガノと一緒にそのあたりを調べてほしい。すでにこちらからの手配は済ませてある」

そう言つて家光はバジルの前にポン、と何かを置いた。

バジルが手に取りそれを見た。

それは、小さな手帳だった。

紺色のビニールのカバーがかけられていて、左半分が透明になっている。

透明なカバー越しに書かれた内容から、それが写真の貼っていない並盛中学校の生徒手帳だと言つことがわかった。

「表向きは留学生として動いてほしい。ただし、ツナ達に本当の目的は内緒でな」

「沢田殿や守護者の皆さんには話せない事なのですか？」

「今の所はな。だから、こちらで処理出来るうちはこちらで済ませ  
ておきたい。いいな」

わかりました、と言ってバジルはうなずくと、持っていた生徒手帳  
をしげしげと眺めた。

「嬉しそうだな」

そんなバジルを家光がニヤニヤしながら見ている。

「いえ、そんな事はありません」

自然と思った事が顔に出たのだろうか。

遊びに行く訳ではないのだから、そう自分をたしなめて気を引き締  
めた。

「構わないさ、むしろ学校生活を楽しんで来るがいい。こう言った  
事も大事だぞ」

バジル自身は幼い頃から家光について仕事をしているため、勉強は  
主に通信教育と仲間達から教わっている。

「調査はちゃんとやります」

そう言いつつ、内心、初めての学校生活にわくわくしているバジル  
だった。

「詳しい話はオレガノから聞くといい。今回の仕事は彼女に全て任

せてあるからな」

「了解しました」

家光に一礼をして立ち上がると、そのまま、バジルは和室を後にしたのだった。

## オレガノ先生

「今日からイタリア語の臨時講師を勤めます、オレガノと言います」

彼女の姿を見たたん、教室中がどよめいた。

無理もない、今まで年配の神経質そうな講師に代わって若くて美人の講師がやって来たのだから。

オレガノの調査先はここ、並盛町でも偏差値の高い学校で有名な女子中である私立緑中学校だった。

表向きはこの学校のイタリア語臨時講師である。

「中学校で教えるのは初めてなので私の授業でわからない事がありましたら遠慮なく言って下さい。私も、この学校やこの並盛町の事とか色々と皆さんに聞きたいですから」

教室中がシン、となる。

その時。

生徒のひとりがパチパチと拍手した。

それを合図に他の女子生徒達も戸惑いながら拍手を始めたのだ。

教室中が拍手に包まれる。

まだ、緊張感がただよっているものの、どうやらこのクラスの子供達はオレガノを受け入れてくれたようだ。そんな雰囲気を感じなが

らオレガノはホツとした。

とりあえずこのクラスとならやっていけそうだった。

彼女がこの学校に来たのは、ある少女を探すためだった。

二週間程前、ボンゴレファミリー傘下のあるファミリーが部下もろとも惨殺された。

犯人はそのファミリーのボスが可愛がっていたひとりの少女だと言われている。

十年程前にイタリアで迷子になっていた所を保護、両親が見つからなかったため、ボスの養子縁組をする矢先の出来事だった。

その後の調査でこの日本にいる所まではわかったのだが、それ以降の足取りはようとしてつかめなかった。

それが数日前、並盛町のこの学校の生徒として在籍している事がわかったのだ。

少女の顔立ちは知っているものの、ここでは当てにならない。彼女を日本へ手引きしたものがいる以上、顔を変えている可能性があるからだ。

その相手が誰なのか、また何人関わっているのか、そこまではわかっていない。

その日は何事もなく学校での一日を終え、校門を出るオレガノに声をかける者があった。

「先生、今帰りですか？」

その声に振り返るとひとりの女子生徒の姿があった。

ポニーテールの髪がよく似合う活発そうな少女に心当たりがあった。  
教室で始めに拍手してくれた生徒だ。

「あなたはええと…三浦ハル、さん」

「ハルでいいです」

女子生徒　ハルはそう言うてにつこりと笑った。

「先生は日本に何度もいらっしゃっているのですか？」

「どうしてそう思ったの？」

何の警戒心も持たないハルのその笑顔に、オレガノもつい笑顔になる。

「日本語が上手でしたから、もしかしたら、と思ったんですよ」

「日本にはあまり行っていないのだけど、日本人の知り合いがいるのでその方から色々教えてもらったの」

オレガノの尊敬する上司である日本人を思い浮かべながら彼女自身、嘘は言っていないとひとり、納得している。

「では、この並盛町は初めてですよ。それなら今日はハルがこの町をご案内します。美味しいケーキ屋さんやかわいい洋服を売っているお店は好きですか？」

屈託のないその話し方にオレガノもつられてまた笑顔になる。

「そうね、美味しいケーキ屋さんは大好きよ。あと、日用品などがそろつ所も教えてもらえるかしら」

「はひつ、喜んでご案内しますっ」

そう言つてオレガノの前を歩き始めた。

（初めてではないのだけど…）

前に行くハルの後ろ姿を見ながら、喉元まで出かかったその言葉を飲み込んだ。

今、それを言つた所でまず理由を聞かれるだろう、それならここは初めてだと言つた方がいい、そうオレガノは判断した。

学校を出てしばらく歩くと並盛商店街の方に出る。その中を歩きながらハルがまず案内したのはケーキ屋だった。

「ここがこの町で一番美味しいケーキ屋さんでえす…あれ、京子ちゃん」

ハルが立ち止まった。

店の前、黒板のまえで立ち止まって見ている女子生徒がハルの声に顔を上げた。

ブレザーの制服からどうやら並盛中の生徒のようだ。

「ハルちゃん」

「やっぱり京子ちゃんですう。京子ちゃんもケーキ屋さんですか？」

「ふふつ。今日はミルフィーユが三割引って書いてあるから、今から買おうかと思って」

「本当ですかあ？あ、でも今新しくこの町に来たオレガノ先生をご案内中ですのであとで買いに行きます」

「じゃあ、売り切れちゃうといけないからハルちゃんの分も買っておいてあげる」

「もし良かったら」

オレガノが話を切り出した。

「私もそのミルフィーユ、お土産にしたいから、一緒に買ってもいいかしら」

「それじゃあ、みなさんで買いましょう」と、ハルが嬉しそうに言った。

美味しいケーキ屋とハルが言うだけあつて店の中は混雑している。三人がそれぞれミルフィーユを買って店を出るとハルがオレガノの持っているケーキの箱を見て訪ねた。

「先生、ケーキそんなに食べるのですか？」

オレガノの持っているケーキの箱はハルや京子の持っているそれより大きい。



ミルフィーユ以外にも他にケーキを買ったためだ。

「それもあるけど、これは日本の知り合いの方にあげるためのケーキです」

「お知り合いがいらっしゃるのですか？」

ハルが不思議そうな顔で聞いた。この町は初めてだと思っているからだろう。

「イタリアでお世話になっている方のご家族がこの町にいるの。この後ご挨拶に伺おうと思って」

オレガノの言うご家族とはもちろん、家光の家族の事だ。

家光やバジルから話を聞いて一度沢田家に行って見たいと思っていた。

今がそのタイミングかもしれない。

「イタリアの方なのですか？」

二人の話を聞いていた京子がオレガノに訪ねた。

「ええ」

「今日、私のクラスにもイタリアからの留学生が来たんです。その子が私やハルちゃんの知っている友達だったのでびっくりしました」

「ハルの知っている友達ですか？」

京子がこっくりとうなずいた。

「ツナ君達もびっくりしてた。ハルちゃん誰だかわかる？」

「ええと…」

少し考え込んでからその友達に思い当たったらしい。にっこり笑って答えた。

「わかりました、バジル君ですね」

「ハルちゃん大当たり。今日この後ツナ君の家で宿題するんだって言ってた」

「ハルもバジルさんに会いたいですう」

そう言ってからオレガノの方を見て説明を始めた。

「バジルさんはツナさんのお友達でツナさん達と一緒にお相撲大会に出ていたんですよ。何も言わずにイタリアに帰ってしまったのでちゃんと挨拶出来なかったのが心残りだったんです」

「そうだったの。それでは町の案内は次の機会にして今からその彼に会いに行かれてはいかがでしょう」

「でも、ハルが町を案内するって言いましたから、そんな事は出来ません。先生を案内してからでも大丈夫です」

自分が言った手前、そんな申し訳ない事は出来ないのだろう。そう

思ったオレガノはハルにこう提案した。

「それでは、私もこの後知り合いの方の家にいきますので、道案内をお願い出来ますか？住所はここなのですが」

ジャケットのポケットから住所の書かれてある紙片を取り出すとハルに見せた。

紙片の住所をハルがまじまじと見ている。その住所に思い当たったのだろう、満面の笑みを浮かべてその紙片を返した。

「ハルこの住所知っています。ここ、ツナさんの家ですよ」

「やっぱり。バジルの名前が出たからもしかしたらって思ったの」

「バジル君の知り合いなのですか？」

今まで黙って話を聞いていた京子がオレガノを見て訊ねた。

「彼から皆さんの事は聞いています。あなたは笹川了平さんの妹の京子さんですね」

京子がその言葉にうなずいた。

「あらためてご挨拶いたします。私はハルさんの学校の臨時講師をしてますオレガノと言います。その節は弟のバジルがお世話になりました」

そう言って二人に頭を下げた。

ここ並盛町に行くにあたってオレガノとバジルは姉と弟と言う事に

なっている。

ハルと京子がそろって頭を下げた。

「それでは、ご挨拶もすみましたので、皆さん、ご一緒に行きましょうか」

オレガノの言葉に二人そろって「はい」と返事を返した。

## 京子が見た日常

話はその日の朝に遡る。

校門の近くにある楠の大樹の前で京子は心配そうな顔でその木を見上げていた。

彼女の視線の先、だいぶ上の枝に子猫がうずくまっていたのだ。どうやら木の上に登ったものの、降りられなくなったらしい。

近くにいた生徒の何人かも為すすべもなく、彼女同様木の上をただ呆然と手をこまねいて見ているだけだ。

誰か人を呼ばないと。そう思ってあたりを見回したその時だった。

京子の横を誰かが通りすぎたのだ。

そのまま彼女の目の前で軽々と木に乗り、枝から枝へと飛び移って行く。そしてあっという間に子猫のいるところまでたどり着いてしまった。

落ちない様幹につかまりながら子猫を捕まえようと手を出している。

その様子に見入っていると、後ろで京子を呼ぶ声がした。

「ツナ君」

京子のクラスメイトであるツナこと沢田綱吉がそこに立っていた。

「おはよう、京子ちゃん。どうしたの、木なんか見上げて」

「あのねツナ君、その木の上に……」

そう言つて楠の上を指差したその時だった。

京子とツナの見ている前で子猫がその手をすり抜けて下へと落ちて来たのだ。

下へ落ちる寸前、木に上った人物がどうにか子猫を受け止める。と、次の瞬間、バランスを崩して枝から滑り落ちたのだ。

「ツナ君！！」

京子が悲鳴をあげると同時にツナの姿が彼女の視界から消えた。

「いつてえ……」

「も、申し訳ございません……沢田殿」

京子の足元で仰向けに倒れたツナにおおいかぶさる様にしてその人物が倒れている。

その声に聞き覚えがあった。

背中を打って痛そうにしているツナもその声を聞いて誰だかわかった様だ。

「バジル君？」

「申し訳ありません。今どきますので」

そう言つて立ち上がるとツナの手を取つて立ち上がらせた。それから、倒れた時に付いた背中の砂をはらつていく。

「大丈夫ですか、十代目」

「ツナ大丈夫か？」

その様子を少し離れた所から見ていた獄寺と山本が駆け寄つて来た。

獄寺の手にあの子猫が抱きかかえられている。

下へと落ちる寸前落ちた衝撃で子猫がつぶれる恐れがあつたためバジルが獄寺の方に放り投げたのだ。

「一体何が……って、お前バジルじゃないか」

獄寺がびっくりしている。

なぜならツナの隣にいたのは並盛中の制服を着たバジルだったからだ。

「皆さんお久しぶりです。今日からお世話になります」

涼しい顔でにっこり笑つて頭を下げるバジルに皆が何も言えずにいた。

ボンゴレファミリーNo.2の組織である門外顧問組織「CDEF」

マフィアの組織No.2に所属している少年が自分と同じ制服を着

てここにいます。

どうしてここに、そうツナがたずねようとしたその時。

それを妨げるかの様に予礼のチャイムが鳴った。

「え、もうそんな時間？」

ツナがあわてて校舎へと走って行く。その後ろ姿に向かってバジルは手を振った。

「あとでお会いしましょう」

その言葉通り、ツナのクラスにバジルは留学生として転入して来たのだった。

休み時間、ツナの隣の席になったバジルの席の周りには、ちょっとした人だかりが出来ていた。

留学生、しかもイタリア人と言う事で始めは様子見をしていたクラスメイトだったのだが、少し古風な話し方ながらバジルが日本語が話せる事、そしてツナの知り合いだとわかって警戒心が解けたのだろつ、徐々に人が集まり始めたのだ。

京子の友人である花が京子の席にやってくると、人だかりが出来ているバジルの席の方を見ながらため息混じりに言った。

「それにしても、沢田の周りつて、変わり者が多くない？」

「そうかな？」



「そうよ。あのスーツの赤ん坊と言い、牛柄のうざいガキと言い、そしてあの古風な話し方をする留学生でしょう。京子、もう少し男を選んだ方がいいわよ」

悪くは言っているものの、その口調には悪意が含まれていない。

「花そんな事言ったら駄目だよ」

そう言いながら少し前の席に座っているツナの方を見た。

そのツナも獄寺や山本と楽しそうに話している。

「じゃあ、放課後よろしくね」

「え？」

「忘れたの？英語の参考書買いに行くから付き合ってたって言ったじゃない」

「大丈夫。覚えてるよ」

「全く」

半ば呆れた様子で苦笑するとじゃあね、と言って自分の席へと戻って行った。

席に戻る花に小さく手を振りながら京子はもう一度ツナの方を見た。

次の授業がもうすぐ始まるせいかツナとバジルの席の周りには誰もいなくなっている。

京子の見ている前でツナとバジルが話している。

とぎれとぎれ聞こえて来る話の内容からどうやら帰りにツナの家で宿題をするのでバジルも一緒に誘っている様だ。

楽しそうに笑っているツナを見ながら京子は次の授業の準備を始めたのだった。

## 日だまりの家

オレガノ、ハル、京子の三人がツナの家に着くと、ツナの母親である奈々が出迎えてくれた。

京子とハルはそのまま二階のツナの部屋へ、オレガノは居間へて通されて行く。

居間へと通されたオレガノはその光景に驚き、そして感心した。

居間のテーブルに雑誌を広げていたのは毒蠍のビアンキ。

居間から見える中庭でボール遊びをしている子供達は、ランキングブックのフウ太、ボヴィーノファミリーのランボ、ギョーザ拳の使い手イーピン。

みなその世界では名うての者達ばかりだ。

しかし、ここで見る限りどこにでもある平和な家庭の光景にしか見えない。

「今お茶入れますね」

奈々が台所へお茶を入れに行くと同時に、ビアンキが雑誌から顔を顔を上げた。

「あら、オレガノじゃない」

「お久しぶりです、毒蠍のビアンキ。日本の生活はいかがですか？」

「愛する人がいればどこにいても天国よ。でも珍しいわね、あなたがイタリアを離れてここにいるなんて」

「私もそう思います」

今回の調査はオレガノ自ら家光に頼み込んだの事だった。

殺されたファミリーのボスはとても世話好きな人で、身寄りのない、または貧しくて学校にも行けない子供達を集めては勉強会をしていた。

字の読めない子供には文字を教え、

計算の出来ない子供にはそろばんを教え、

時々自分の部下も子供達と共に勉強会をする事もあったと言う。

オレガノもその中で子供達に勉強を教えたり、教えてもらっていたりとしていた。

そんなオレガノを名門大学に行かせてくれたのも、門外顧問組織に推薦してくれたのも、そのファミリーのボスだった。

彼がいなければ家光の秘書としてのオレガノはいなかったかもしれない。

無理を承知のお願いではあったのだが、家光は快く承諾してくれたうえにバジルまでつけてくれたのだ。

ただし、一ヶ月と言う期限付きなのだが。

「お口に合うかどうかかわからないのですが、良かったらどうぞ。ビアンキさん、お茶のお代わりは？」

「お願いします」

そう言うのと、置いてあった白いマグカップを奈々に差し出した。

オレガノの前に差し出されたのは日本茶と栗羊羹だった。

家光がよく食べているため羊羹は嫌いではない。ありがたくいただく事にした。

「ありがとうございます。あと先日はバジルがお世話になりました。ご挨拶代わりで申し訳ありませんがこちらをどうぞ」

そう言うて先刻買って来たケーキを出した。

「あらあら、そんなに気を使わなくてもいいのよ。こちらこそ、ツナがお世話になったのですもの、お互い様よ」

「ママン、せっかくですから頂きましょう」

ケーキの箱を見ながらビアンキが言った。奈々もそうね、と言って中庭の子供達を呼びに行く。

奈々が中庭に行くのを見ながらビアンキはオレガノに訪ねた。

「ここにはどの位いるの？」

「一ヶ月の期限付きです。あまり親方様のそばを離れる訳にはいき

「ませんから」

「そう。組織にいるのもなかなか大変ね」

「そうですが、親方様の元で働けるのはありがたいと思っています」

そんな話を話しているうちに二階からツナが降りてきた。そして、台所で飲み物を入れている奈々に何かを頼み込んでいる。奈々がうなずくと嬉しそうに二階へとあがって行った。

ツナが二階に上がったのを見てから奈々はオレガノの方に来て言った。

「ツー君が今日バジル君をここに泊めたいと言っているのだけど、よろしいかしら？」

「私は構いませんが、ご迷惑ではありませんか？」

「こちらは大歓迎ですよ。ツー君もバジル君が来てくれて嬉しそうですし」

「ならオレガノ、あなたも一緒にどうかしら。ママン、構いませんか？」と、ピアンキが言う。

「たまには女同士夜通し語り合うのも悪くないわよ」

「それはいいわね。オレガノさん、いかがかしら？」

「でも、私も一緒で迷惑ではありませんか」

「こちらは大歓迎よ」そう言っている奈々もとても嬉しそうだ。本

当に泊まって行つてほしいのだろう。

幸い、明日は学校が休みの土曜日である。

「それでは、お言葉に甘えさせて頂きます」

「じゃあ、今夜はごちそうね。もし良かったらお二階の子供達にも夕食食べて行くか聞いて来ましようね」

「私が行きましょう。バジルにもここに泊まる事を話しますので」  
そう言うとおレガノは立ち上がつて二階へとあがつて行つた。

二階のツナの部屋の前に来ると、にぎやかな声が聞こえて来る。その扉をノックすると、はい、と元気なハルの声と同時に扉が開いた。

「あ、先生」

「ここではオレガノでかまいません。ところで、皆さん今日は夕食をここで食べて行きませんかと言われましたけど、いかがですか？」

結局、みんな食べて行くと言う事になり、オレガノとバジルの歓迎会を兼ねた夕食と言う事になった。

奈々の心尽くしの手料理をおいしくいただきながら、オレガノはツナ達と楽しそうに話をしているバジルを見た。

以前バジルと話をしていた時、彼は沢田家にいた時の事を「まるで日だまりの様な暖かい家でした」と言っていた。

今のバジルを見て何となく納得出来る。

それを隣で一緒にサラダを食べているピアンキに話すと、「そうね」とうなずいてこう言った。

「私もここが一番好きよ。ここには私達が味わえない普通の、平和な生活がある。」

普通なら私みたいな者は警戒されてしまうのに、ママンはそれを楽しそうに受け入れてこうしていろいろと世話を焼いてくれる。

この世に聖母がいるのならまさにあの人の事を言うのでしょね」

ピアンキらしくないその言い方にオレガノが意外そうな顔を見ると、

「私だって、こう言う時位あるわよ」

と、照れ臭そうに笑った。



## 眠れない夜

それから一週間、何事もなく日は過ぎて行った。

オレガノもバジルも搜索は続けているものの、様として探している少女は見つからない。

何もかも八方塞がりかと思われたその時、意外な所でその手掛かりが出て来たのだ。

その手掛かりのきっかけは、クロームからだった。学校の授業を終えたオレガノが公園のそばを歩いていた時だった。

公園のベンチでひとりの少女が気分悪そうに座っていたのだ。

午後の暖かな日差しとは対称的に少女の顔は真っ青でとてもつらそうだ。

右目に黒い眼帯をしたその彼女の顔にオレガノは見覚えがあった。

ボンゴレリング霧の守護者、クローム髑髏。資料では見ているものの、実際に会うのは初めてだった。

そのつらそうな姿に黙っていられず、オレガノは声をかけた。

「大丈夫ですか？」

その声にクロームの体がビクッ、と一瞬こわばる。それからおずお

ずとオレガノの方を見た。

「ごめんなさい。気分悪そうで見えていられなかったから。この近くに知り合いの家があるので良かったらそこで休んで行かれてはいかがでしょうか」

この近くなら沢田家があり、そこなら彼女を休ませる事が出来る。しかし、クロームはそんな彼女の言葉に耳をかさない。黙って立ち上がり、歩き出そうとした時だった。

不意にその身体がフラツとよろめく。前のめりに倒れる寸前、先回りしていたオレガノが抱き止めた。

顔をのぞきこむと顔色は良くないものの、呼吸はしつかりしている。この様子ならすぐ病院に連れて行く事もないかもしれない。ここで少し休ませてそれから連れて行っても遅くはないだろう。

クロームをベンチに寝かせると自分もその横に座って本を読み始めた。

日も暮れて、本の文字が見えなくなり始めた頃、クロームが目覚めました。

「お目覚めですか」

本をバッグにしまいながらオレガノが訪ねる。

ベンチから半身を起こしたクロームが不思議そうな顔で彼女を見た。

「私はボンゴレファミリー門外顧問組織のオレガノと言います。ボ

ンゴレリング霧の守護者クロームさん、調子はどうですか」

門外顧問組織と聞いてクロームも警戒心を緩めてくれたらしい。牢獄を脱獄した彼女の仲間である犬と千種が自由でいられるのも門外顧問組織の家光が動いてくれたのを知っているからだろう。

「久しぶりに寝たから大丈夫」

その口ぶりからクロームがここ数日寝てなかったのが見て取れた。

「もし良かったらどうしてそうだったのか話して頂けないでしょうか」

仲間が大騒ぎして眠れないと言っ訳ではなさそうだ。

そんな事を考えながらオレガノはクロームの次の言葉を待った。

「歌が聞こえるの」

「歌、ですか？」

クロームがこっくりとうなずいた。

「夜になると毎日。一晩中聞こえて来るの。犬と千種も知らないって。何度も気のせいだと言われたの」

「どんな歌なのですか？例えばロックみたいな騒がしい歌とか」

「違う」

うつむきながら首を横に振ります。

「ただ静かな歌。静かすぎてかえって眠れないの」

どう言う意味なのだろう。そう考えているうちにクロームが立ち上がり、何も言わずに暗闇の方へと去って行った。

素っ気ないクロームの行動に微笑みながら今夜あたり黒曜ランドに行ってみようか、オレガノはそう考えていた。  
黒曜ランドは隣町の旧道ぞいにある。

以前は大型レジャー施設として賑わっていたここも土砂崩れで半壊してから修繕もされずに今は廃墟となっている。近くに新道が出来てから車もめったに通らなくなっている。

その廃墟に、クロームは仲間と共に住みついている。

オレガノがバジルを連れてここに来たのは夜もかなり更けた頃だった。

黒曜ランド近くは人も車もめったに通らないため、街灯もついていない。

半ば暗闇の中を二手にわかれて様子を見る事にした。

しばらく暗闇の中をじっとしていると、目も慣れて来たのだろう、おぼろげながら周りの様子が見えて来た。

オレガノがいるのは、廃墟の黒曜ランド正面から左側の壁の端の方。半ば崩れかけた壁のそばに立って辺りを見回している。

見たところ、人の気配はない。

静か過ぎて眠れない、とクロームは言った。

あれからその意味を考えてみたものの、何度考えてもその意味がわからない。

そんな事を考えているうちに雲が切れて半月の月が顔を見せ始めた。

その明かりでほんの少しだけあたりが明るくなる。

その時だった。

微かに、歌声が聞こえて来たのだ。

（来た）

あたりを見回したものの、人の姿はない。しかし、歌声は微かに聞こえて来る。

そして次の瞬間。

不意に周りの音が全て消えたのだ。

遠くの新道を走る車の音、近くで鳴いていた虫の鳴き声まで、全て周りの音が消えてしまった。

まるで音のない世界にいる、そんな感じだった。  
その中をあの歌声だけが微かに聞こえて来る。

クロームが静かすぎて眠れないと言った意味がわかった様な気がした。

音のない世界がこれ程人を不安にさせ、孤独にさせるものだとはオレガノ自身、思ってもみなかったのだ。

微かな歌声を頼りに声のする辺りを検討つけて見るものの、人影は見えない。

不意に、歌声が途絶えた。

同時に、周りの音が聞こえ始める。

まるで何もない世界から現実に取り戻される、そんな感覚に軽いめまいを感じながらオレガノはバジルの方へと走って行った。

正門から右側の壁の端の方に、バジルがメタルエッジを構えて立っている。

そのバジルと向かい合う様に、ひとりの銀髪の長い髪の少女が立っていた。

月を背にしているため、少女の顔は見えない。しかし、彼女の着ている制服から彼女が緑中の生徒だと言う事はわかった。

こんな深夜に中学生が出歩いている。

人気がないこんな所で一体何をやっているのだろう。  
オレガノがそう思った時だった。

不意に少女が長い髪をなびかせて動いた。  
バジルに背を向けて逃げ出して行く。

慌ててバジルが少女を追いかけてようと動くものの、すでに少女の姿はなかった。

「申し訳ありません。逃げられました」

バジルがオレガノに申し訳なさに頭を下げる。

「仕方ないわ。それより、彼女の顔を見たの？」

「いえ、暗くてよく見えませんでした。でもあの制服は確か、緑中  
のでは？」

「間違いないわ」オレガノはうなずいた。

「もしかしたら彼女が私達の探している人物かもしれない」

それからしばらく待ってみたものの、結局彼女が戻って来る事はなかった。

黒曜ランドをあとにしながらオレガノはバジルに訪ねた。

「バジルはあの歌を聞きましたか」

「聞きました」

そう言いながらバジルはうなずいた。

「あれは一体何でしょうか。まるで…音のない世界に落ちた様な感じでした」

確かに、とオレガノも思う。

「私にもよくはわからない。どちらにしても、もう少し彼女についての事を調べてみる必要があるわね。  
私は引き続き緑中で調査を試みる。バジル、あなたは引き続き並盛中での調査をお願いします」

「わかりました。オレガノ、気をつけて」

この時、二人は気付かなかった。

これが、戦いの始まりだと言っ事に……。



## 戦いの火蓋を切る者は

その次の日の学校の帰り道、バジルは獄寺と一緒に歩いていた。

バジルがオレガノと一緒に住んでいる賃貸型マンションは獄寺の住んでいるマンションの少し先にある。  
そのため、一緒に帰る事が多い。

その二人が、同時に立ち止まった。

二人の行く先、同じ並盛中の制服を着た少女が立っていた。

長い髪を上結び、美しい蜻蛉玉のついたかんざし付きの黒いリボンで止めている。

切れ長の瞳の美しい少女だった。

その少女が二人を見て行った。

「昨日、かけるを襲ったのはどっち？」

「かける？」

バジルが聞き返す。それが答えだと思ったのか少女が右手を上げた。  
その手には鉄扇が握られている。

「あなたね。ふうん、マフィアの人って聞いたからもおじさん

だと思つてたんだけど、こんな子供もいるんだ」

「てめえ、何者だ」

獄寺が険しい顔で聞き返す。少女のヤバい雰囲気を感じ取ったのだろつ。

普通の人なら獄寺のこの気迫にたじろぐ事だろう。しかし、目の前の少女は平然としたものだ。

「人に物を訪ねる時は自分から名乗るものでしょう。でも、名乗った所であなただに名乗る理由なんて何一つないけど」

そつ言つとバジルに襲いかかった。

両手に持った鉄扇がバジルの頭を割る寸前、バジルが後ろによける。

獄寺が武器として使っているダイナマイトを両手に持つて身構えると、バジルに叫んだ。

「バジル離れろ！……この野郎、果てる！！」

バジルが少女から離れると同時に、火のついたダイナマイトが少女に向かって飛んで行く。

少女の周りで獄寺の飛ばしたダイナマイトが爆発した。

爆煙で少女の姿が見えない。火薬の量のある程度抑えているとはいへ、この至近距離で爆発すれば少女も無事ではすまないはずだった。

ところが。

「こんなもんなの？」

爆煙が収まると、開いた鉄扇を持った少女が現れた。

あれだけダイナマイトを投げられたにも関わらず、制服が多少汚れただけで怪我ひとつしていない。

「もう少し齒ごたえがあると思ったけど、弱いわね」

「うるせえっ！二倍ボム！」

もう一度獄寺がダイナマイトを増やして投げつける。それを少女は全て鉄扇で弾くと獄寺に向かって飛びかかった。

「覚悟しなさい」

「覚悟するのはそっちだぜ！」

獄寺がニツと笑った。

その顔に鉄扇が届く瞬間。

不意に少女の後ろで何かが爆発したのだ。

その爆風で少女が地面に叩きつけられる。

獄寺が二倍ボムとして放ったダイナマイトはロケットボム 空中で方向を変えられるダイナマイトだった。  
獄寺自身が作った特殊ボムで動きがかなりトリッキーなため彼自身でしか扱う事が出来ない。

「答える！てめえ何者だ！」

少女の方は地面に叩きつけられた衝撃で呻いている。  
それでも立ち上がると頭をふりつつ、笑った。

「名乗る理由はないと言ったでしょう。でも、私をここまで追い詰めたのだからこれだけは教えといてあげる。」

「夜」に気をつけなさい」

そう言うと、二人の前から消えてしまった。

「待てっ！」

あわてて近くをさがすものの、少女の姿はもう見えない。

「逃げられたか」

ため息をつきながら獄寺が頭をかいた。

「それにしてもあいつ、一体何者だ？見た所並中の制服を着てたが、生徒なのか？」

それからバジルの方を見て訪ねた。

「バジル、お前俺達に内緒で何を調べているんだ？あの女はお前をマフィアの者だと言った。なら俺達にも関係してるんじゃないのか？」

獄寺がいつも「十代目」と呼んでいるツナは候補とは言え、大手マ

ファイアであるボンゴレファミリーのボスである。

立場上はマフィアに属していると言ってよかった。

「申し訳ございません、今はまだ何も言えません。

拙者のせいで獄寺殿を巻き込んでしまい申し訳なく思っています。そして巻き込んでしまってこんな都合のいいお願いをするのも申し訳ないのですが、今起こった事は誰にも言わないで頂けないでしょうか？」

「誰にもか」

「はい。もう少し敵の正体がわかってから改めてお話します。それまで誰にも話さないでほしいのです」

しばらくの沈黙。バジルを半ば睨む様に見ていた獄寺が何も言わず地面に落ちていたバジルの鞆を拾って手渡し、自分の鞆も拾った。

「十代目に迷惑かけんじやないぞ」

そう言ってすたすたと先を歩いて行く。

先を歩く獄寺に頭を下げると、バジルは獄寺の後を歩き始めた。

## 危機を救う者は

獄寺が少女と戦っていたその頃。

オレガノも目の前の敵と戦っていた。

学校の帰り道、なぎなたを持った並盛中の制服を着た少年に襲われたのだ。

目の前の少年は、前髪をおでこの上で結んでいるのと背の低さで小学生位に見える。

着ている並盛中の制服も彼には少し大きいのだろう、まるで服が歩いている様に見えた。

「お姉さんには何の恨みもありませんが、何しろ、あの方の依頼でして。そうですね、腕の一本辺りで手を打ちますが」

日本では銃を持ち込めなかったため、今のオレガノは武器を持っていない。頼れるのは己自身だけだ。

「私のは高いですよ」

「お姉さんに選択の余地はありませんよ」

そう言ってなぎなたを振り下ろした。

その刃をひとつ飛びでよけ、一気に少年の懐へと飛び込んで行く。

オレガノの手が少年の首を掴もうとしたその瞬間だった。

少年がなぎなたの柄でオレガノをなぎ払ったのだ。

オレガノが短い悲鳴と共に横へと吹き飛び、地面に叩きつけられる。  
「言っただでしょう、選択の余地はないと」

痛みをこらえながら右脇腹を押さえながらオレガノが立ち上がる。

その姿を見て少年は感心した。

「お姉さん強いね。でも立っているのがやつとでしょう」

そう言うともう一度なぎなたを振り下ろした。

右脇腹の痛みで逃げるのが一瞬遅れる。

あっという間にオレガノの左肩が血に染まった。

もう少しよけるのが遅ければ腕が落ちていたかもしれない。

「今度はよけないで下さいね」

そう言っただけで少年がなぎなたを振り上げたその時だった。

「子供がこんな物振り回したら危ないぞ」

不意に少年の後ろで声がしたのだ。

同時に、少年の動きが止まった。

声のする方をオレガノが見ると、少年のなぎなたをつかんでいる山本の姿が見えた。

「離せ！」

なぎなたを引っ張るものの、万力で固定されたかのように動かない。

「離せ！！」

もう一度少年が叫ぶ。今度は山本もそれに応えて手を離れた。

急になぎなたを離されたため勢い余って少年がよろける。そのまま山本と向き合う形となった。

山本もまた、少年が並盛中の制服を着ている事に気がついた。

「あれ、中学生だったか。いやぁ小学生と言って悪かったな」

バツの悪そうに山本が笑う。それが少年には気に食わなかったらしい。

「黙っていれば命長らえたものを」

そう言う山本に襲いかかった。少年のなぎなたをよけると同時に山本が肩に下げていた細長い袋から竹刀を抜いた。

もう一度少年が山本に襲いかかる。

その次の瞬間。

澄んだ音が辺りに響き渡った。



少年の目の前、カラン、と音を立ててなぎなたの先が転がり落ちる。

山本の手には抜き身の刀、時雨金時が握られていた。

「ワリイな。黙っているのは俺の性分じゃなくてね」

「お前…、何者だ？その刀と言い、その動きと言い、只者じゃないだろう」

無理もない、持っていた竹刀が突如真剣へと変わったのだから。これを見れば少年でなくても只者ではないと思うだろう。

「そうか？」

山本がニツと笑う。

「ほめてくれてありがとな」

「ほめてないっ！」

そう言う少年は落ちていたなぎなたの先を拾うと山本の前から姿を消した。

しばらく様子を見て、少年がいないのを確認すると山本はオレガノに近づいた。

「大丈夫か」

「すみません…、助けて頂いて」

「いって。それより酷いな、その傷。どこか病院に連れて行かな

いとな」

辺りを見回すものの、この近くに病院は見つからない。ここからだとかなり先まで行かないといけないだろう。

「よし」

病院はないが、この近くに医者がいるのを山本は思い出していた。

「少し、我慢して下さい」

そう言うと、オレガノに肩を貸して歩き始めた。

コンスイツリユール      D r シャマル（前書き）

コンスイツリユール      イタリア語で「助言」の意味。

## コンスイツリユール      Dr シャマル

山本が行った先は並盛中だった。野球部の練習中、怪我をした後輩を保健室に連れて行った時、Dr シャマルがいたのを思い出したからだ。

日もかなり落ちている。もう誰もいないかな、そう思いながら校舎の外から保健室をのぞくと、閉められたカーテン越しに明かりが漏れているのが見えた。

そこから人影が見える。どうやら人がいるらしい。

外からコンコン、とガラス窓を叩くと、人影が動いた。

カーテンが開かれて中からシャマルが顔を出した。顔が赤い所を見ると、中で一杯引っかけていたに違いない。

窓を開けながらシャマルが山本の姿を見て不機嫌そうな顔をした。

「何だあ、また怪我人か？なら適当に薬持ってけ」

とても医者言葉とは思えない。

「まあまあ、そう言わずに。ここしか頼れる所はなかったんだからさ」

そう言うと、少し身体をずらしてぐったりしているオレガノをシャマルに見せた。

保健室の明かりにジャケットの左側を血で赤く染めたオレガノの姿が浮かび上がる。

その顔色は真つ青を通り越して白くなっていた。

「……オレガノじゃねえか」

「お久しぶりです、Drシャマル」

ぐったりしているオレガノを見てシャマルの酔いも醒めた様だ。窓を大きく開けると中に入る様山本を促した。

「全く、美人が大怪我しているって何で早く言わないんだ？それに山本、お前がついていながら何てザマだ。治療が終わったら何があつたか全て聞かせろ」

「わかった。あと、電話借りていいか。バジルに連絡取らないといけないからな」

それから数十分後、山本から連絡を受けたバジルが血相を変えて保健室へと駆け込んで来た。

「すみません、オレガノは大丈夫ですか」

「静かにしろ。彼女なら大丈夫だ」

治療を終えて血だらけの手を洗っていたシャマルが紙タオルで手を拭きながらバジルを睨み付けた。

「薬が効いて眠っているんだ、あまり騒ぐなよ」

「すみません」と、バジルが素直に頭を下げた。それから、廊下側のドアの近くで丸椅子に座っている山本にも頭を下げた。

「山本殿、オレガノを助けて頂いてありがとうございました」

「気にするなつて。彼女も無事だったんだしな」

山本が気さくに笑う。その屈託のない笑いを見て、山本まで巻き込んでしまった事にバジルは心が傷んだ。

「山本からだいたいの話は聞いた。並中の男子生徒がオレガノを襲ったそうだな。しかも、なぎなたで襲いかかったと聞いたぞ」

険しい顔でシャマルが言う。

「なぎなた…」

ふと、獄寺と戦った鉄扇の少女が思い浮かんだ。もしかすると、彼女の仲間なのだろうか。

「お前達は何故日本にいるのか詳しい事は聞かないが」

丸椅子をひとつ引き寄せて座ると飲みかけのカップ酒を手にとってシャマルは尋ねた。

「お前達二人で肩がつくのか」

シャマルの言葉にバジルは考え込んだ。

獄寺が戦った少女がオレガノを襲った少年の仲間なら、すでに獄寺も巻き込まれた事になる。

このまま何も言わずにいていいのだろうか。

ベッドの方を見ると、カーテンの影になってオレガノの姿は見えない。

（親方様、オレガノ、ごめんなさい）

心の中で二人に謝りながらこの日本に来た目的と今日獄寺と戦った鉄扇の少女の事を話したのだった。

「夜に気を付けろ、か…ちょっと待てよ」

シャルが何か思い当たったらしい。

「何でしょう」

「スペインのマフィアの事を思い出してな。ノーチェファミリーと言っただが」

「ノーチェファミリー？」

聞いた事のない名前だった。確かにノーチェと言えばスペイン語で「夜」を表す言葉だ。

ただ、そんなファミリーがあるのをバジルは聞いた事がなかった。

考え込んでいるバジルに、シャルが捕捉説明をした。

「バジルが知らないのも無理はない。一度マフィアの世界から抹殺された名前だからな」

「その、ノーチェファミリーがどうしたのですか」

心なしか、バジルの顔が真剣身をおびてくる。

「ノーチェファミリーはその昔、子供ばかりを専門に誘拐する組織でスペイン国内やその近隣諸国で誘拐を繰り返していたんだ」

「その子供達はどうなったのですか？」

「聞かない方がいい。あまりいい話ではないからな。」

その子供達の中で将来性のあるのを選んでファミリーの中で育てていた。十年位前か、ファミリーの中で内紛争いが起こった時、その子供達はひとり残らず殺されたと聞いたが、どうもそうではないらしい」

「そうではない、とは」

「あのゴタゴタだからな、何人かいなくなっても不思議ではないさ。その内紛争いでファミリー自体はなくなったのだが、最近、またそのノーチェファミリーが復活したと聞いた。」

そして、その部下がこの日本に来ているらしい」

そこで一息つくと、酒に口をつけた。

「まあ、これがお前達のしている事と関係あるのかわからないのだから」

確かに、シャマルの言っている事は全て憶測でしかない。オレガノ



が探している少女がそのノーチエファミリーと関係あるとは限らないからだ。

「明日、獄寺殿に話します。沢田殿にも話は通しておきたいと思います」

そうだな、とシャルマルが頷いた。

獄寺や山本が巻き込まれた事でボンゴレファミリー十代目である沢田綱吉の身に危険がおよぶのも時間の問題だった。

「Drシャルマル、色々と有難うございました……オレガノをよろしく願います」

「大丈夫だ、手は出さねえからよ」

すでに二本目のカップ酒を開けている。

「話は終わったみたいだな」

黙ってこのやり取りを何気なく聞いていた山本が立ち上がった。

「オレガノ先生を送って行くのなら人手がいるかと思って待っていたけど、どうやら俺の出番はなかったみたいだな」

「何から何までご迷惑おかけしました」

再度、バジルが頭を下げた。

「何度も頭を下げなくてもいいさ。じゃ、俺帰るな」

「拙者も帰ります」

シャマルからの返事はない。

そのまま、二人は保健室を後にしたのだった。

## 家光からの知らせ

その次の日、バジルは少し早目にマンションを出た。

早朝に学校に行ったものの、学校の中に入る事が出来なかったからだ。

学校の中に入ると、まず真っ先に保健室へと向かった。

静かに保健室の扉を開けると、中に人の姿はない。しかし、ベッドのあるカーテンの影から人の声が聞こえて来た。

耳をすますと、間違いなくオレガノの声だ。それ以外にももうひとり、声が聞こえて来る。

シャマルの声ではない。しかし、聞き覚えのある声だった。

カーテンを開けようか迷ったその時だった。

「そこに立ってないで入ったらどうだ？」

もうひとりの声が不意にカーテン越しに聞こえて来た。どうやらバジルがいる事に気付いたらしい。

同時に、バジルもその声が誰の者か思い出した。

カーテンを開けると、バジルの思った通りの人物がそこにいた。

シャマルの物だろうか、白い男物のワイシャツを着て上半身を起こしているオレガノと向かい合わせにベッドの上にちょこん、とりボーンが座っていたのだ。

そのリボーンがニツ、と笑った。

「ちゃおっす」

「おはようございます、リボーンさん。オレガノ、調子はいかがですか？」

「Drシャマルのお陰ね。痛みは大分引いたわ。傷も出血の割には酷くないって言うてくれましたし」

「学校の方には連絡を入れておきました。あと、これは着替えです」  
そう言って持っていた紙袋をベッドの脇に置いた。

「有難う、バジル」

オレガノが紙袋の中身を取り出す。  
その間、着替えの邪魔にならない様にバジルとリボーンはカーテンの外へと出て行った。

「ところでリボーンさん、オレガノと一体何を話していたのですか？」

「昨日の一件だ。シャマルからも話を聞いたが、事は人探しだけではすまなくなっているみたいだな」

「その通りです」と、バジルは頷いた。

「そこでだ、ツナにも手伝わせる事にした」

自分の不甲斐なさを責められると思ったバジルはこのリボーンの言葉に驚いた。

「そんな顔をするなよ、バジル」そんなバジルを面白そうにリボーンは見ている。

「遅かれ早かれこうなるんじゃないかと家光も言っていたしな」

「親方様がですか？」

リボーンがスーツの内ポケットから白い封筒を出した。

「数日前に届いた家光からの手紙だ。今回の件について書いてある」

「拝見させていただきます」

リボーンから封筒を受け取り、中の手紙を開いた。

イタリア語で書いてあるその文字は間違いなく家光の字だった。

内容を見ると、家光も同時進行でこの件を調べていた事、その結果、あるマフィアが存在が浮かび上がった事が書いてあった。

手紙を元の封筒に入れてリボーンに返すと同時に、カーテンが開いて着替えを終えたオレガノが現れた。

「バジル、学校が終わったら沢田殿の家へ来てもらえますか。沢田

殿はもちろん、山本さんと獄寺さんも一緒をお願いします。皆さんに今までの事、これからの事を話したいと思いますので」

「それで、オレガノはどうするのですか」

「私は親方様と連絡を取ります。調べなくてはいけない事も増えましたから」

「そうだな」と、リボーンが頷いた「俺も一緒に行こう。その怪我じゃ戦うのは無理だからな」

「なら拙者が一緒に行きます」

「バジルはいい。ツナ達に話をしないといけないし、それに、この並盛中に昨日の連中がいるのか見ないといけないのだろう？」

確かに、リボーンの言う通りだった。

昨日の二人は並盛中の制服を着ていた。もしかしたらこの学校の中にいるかもしれないのだ。

「そちらはバジルに任せます……お願い出来るかしら」

「はい……。オレガノも気をつけて」

そう言うと、バジルは保健室を出て行った。

バジルが出たあとの保健室の扉を見ながら、オレガノはつぶやいた。

「本当ならバジルには一ヶ月間この学校で平和な生活をしてほしかったのですが……。結局、それも叶いませんでした」

「仕方ないさ。俺達がいる世界はそう言う所なんだからな。バジルだって、その位はわかってるさ」

淡々と話すリボーン言葉に、オレガノはただうなずくだけだった。

その日の昼休み、バジルは学校の屋上にツナ達を呼び出した。

バジルの、いつになく真剣な表情にツナはバジルに何かあったかと不安になっている。一方の獄寺と山本はと言うと昨日の件だと思っているのだろう、バジルの次の言葉を待っていた。

「獄寺殿、山本殿」

そんな三人を前に、バジルは話を切り出した。

「昨日はありがとうございました。今朝、オレガノとリボーンさんと話し合って来ました。」

それで、これはリボーンさんからなんですが、この件は皆さんに手伝ってもらう様に言われて来ました。今日学校が終わったら沢田殿の家に集まってほしいとの事です」

「リボーンさんからと言う事は、もしかして俺達、とんでもない事に巻き込まれたのか？」

「すみません」獄寺の問いにバジルはうなずいた「詳しい事は後でお話します」

「オレガノ先生は大丈夫なのか？」と、山本がバジルに尋ねた。

「はい。Drシャマルのお陰で動ける様になりました。今リボーンさんが一緒にいてくれています」

「そっか、なら安心だな」

「オレガノに何かあったのか？」

さりげなく獄寺がたずねる。

「昨日、なぎなたを持った並中の生徒に襲われていたのを助けたんだ。病院までは遠いからここの保健室へ連れて行った」

「げっ、シャマルの所に連れて行ったのかよ。治療と言って変な事をしたんじゃないやねえだろうな」

「あの…」

今まで話を黙って聞いていたツナがおそろおそろ聞いた。

「三人とも、昨日は何があったの？」

「すみませんっ、十代目」

この言葉に慌てたのは獄寺だった。何も知らないツナそっちのけで話していたため、彼の機嫌を損ねたと思ったのだろう。

「十代目を仲間外れにしたとかそういう訳ではありませんから」

「そう思って言った訳じゃないんだけど、ただ、三人とも一体何があったのかなと思って」



「沢田殿の言う事も最もです。お二人共、昨日の件を沢田殿にお話されてはいかがでしょう」

「いいのか？」と、獄寺がバジルにたずねる。昨日の事を内緒にしてほしいとバジル自身に言われていたからだ。

「お願いします。このまま隠すのなら今の内にみんなで話し合って今後の対応をするのが一番だと思いますし、何より沢田殿には特に知っておいてほしいのです」

「俺が？でもどうして…」

「お前がボンゴレファミリーの十代目だからだろうが」

どこからか四人以外の声がした。

「誰だ！？」

獄寺が叫ぶと同時に、その声の主が飛んで来てツナの後頭部に当たったのだ。

「いだだだだ…」

相当痛かったのだろう、頭を押さえてツナがうずくまる。

「よけないツナが悪いぞ」

いつの間に来たのだろう、バジルの頭の上に並盛中の制服を着たりボーンが座っていた。

どこから飛んで来たりボーンがツナの後頭部を両足で蹴り、その反動でバジルの頭の上に着地したのだ。

「最強の赤ん坊」と言われたりボーンだからこそ出来る技だった。

「リボーンさん。オレガノと一緒に行動してたのではなかったのですか」

頭の上に乗っているリボーンを落とさない様に気をつけながらバジルはたずねる。

「途中でビアンキに任せて来た。今頃はツナの家にいるはずだぞ。それより、その話、俺にも聞かせろ」

「じゃ、俺からだ」

そう言くと、獄寺から昨日の件を話し始めた。

獄寺と山本がひと通り話し終わると同時に、予礼のチャイムが鳴り響く。

昼休みはもう終わろうとしていた。

「三人共大変だったね。でも無事で良かった。それにしても、オレガノやバジル君を襲った奴って一体何者なんだろうね」

「それをお前達が調べるんだぞ」

バジルの頭の上であぐらをかきながらリボーンが言った。

「ファミリーに関わる重大な事だからな。ましてや大事なファミリーの一員が怪我をしたんだ、お前が動かないでどうする?。」

「だから、マフィアになんかならないって」

ツナが文句を言うものの、リボーンは聞いていない。

「じゃ、今日はツナの家に集合な」

山本がにこやかに締め括った。

「十代目、今日は家までお供します」

心なしか獄寺も嬉しそうだ。

「見る、お前の部下達はやる気だぞ。お前もファミリーのボスとしてこいつらに恥ずかしくないボスにならないとな」

「だから、俺はボスじゃないって!!」

そんなツナの声もただただ虚しく屋上に響き渡るばかりだった。

## 作戦会議

学校が終わってツナが自分の家の玄関を開けた次の瞬間、獄寺がかしな悲鳴と共に、泡を吹いて倒れた。

「あら、お帰りなさい」

にこやかに笑って玄関に立っていたのはビアンキだった。

「あら、隼人も一緒なの」

仰向けに倒れている獄寺を見ながらビアンキがあきれている。

「ビアンキ、中に入って。山本悪い、獄寺君を二階に連れて行ってくれる?」

「拙者も手伝います」

山本とバジル両方で気を失っている獄寺を挟む形で二階へとあがって行く。

三人があがって行くのを見てツナはビアンキに聞いた。

「オレガノは来ているの?」

「ええ。今眠っている所よ。ママンがオレガノが調子悪そうにしているのを見て布団を用意してくれたの」

「オレガノの怪我、そんなに酷いの？」

「オレガノ本人は大丈夫と言っていたけど、やっぱり動くとならうまいね。本当ならあと二、三日はゆっくりしていた方がいいと思うわ」

「私なら大丈夫です」

その言葉と同時に、奥からそのオレガノ本人が出て来た。少し眠っていたせいか、大分顔色がいい。

「自分の身体は自分がよく知っています。ご心配をおかけしましたが、私は大丈夫です」

ツナが心配そうにオレガノを見ている。そんなツナに頭を下げると、オレガノは二階へとあがって行った。

「あなたも早く行きなさい。ボスが行かないと始まらないでしょう」

「そうだね…って、俺、ボスじゃないんだけど…」

そう言いながらツナも二階へとあがって行った。

二階の扉を開けると、ツナのベッドで今しがた目が覚めたばかりの獄寺と、リボーンのいる中央のテーブルを囲んで山本、バジル、オレガノがいた。

「すみません、十代目」

ベッドの上で獄寺が頭を下げる。それからベッドから降りてバジルの隣に座った。

とある理由でビアンキを見る度に獄寺は倒れてしまったため、すでにこう言った事はみんななれている。

「みな揃ったな」ツナが最後に座るとリボーンが口を開いた。

「それじゃあ、始めるぞ」

「それでは」と、オレガノが持っていた手帳を開いた。

「親方様と連絡を取りました結果、リボーンさんのおっしゃった通り、この件にはノーチェファミリーが関わっている事がわかりました。まずはこのファミリーの事からお話しましょうか」

「そうだな」とリボーンがうなずいた。

「わかりました。まずは十年前の内紛の事からお話しましょう」

部屋にいる面々の様子を確認するかの様に見回してからオレガノは話し始めた。

「十年前、ノーチェファミリー内を二分する争いが起きました。これは当時のファミリーのボスにその側近が戦いを仕掛ける形で起こったものです。どうしてそうなったのか理由はわかりませんが、結局、どちらも死亡と言う事になり、このファミリーはマフィアの世界から抹消されました。

その内紛自体でファミリーの殆どは死亡したのですが、生き残っていた者もいまして、その者達が最近、ファミリーを復活させています。

そのファミリーのリーダーがバルバブル・ヴァレリオ・ジュニア。

側近であつた青ひげの息子と言つた方が分かりやすいかしら」

「懐かしい名前だな。親父の青ひげはダリーオと相討ちになつたんだよな」

「はい。ノーチエファミリーのボス、ダリーオ・ノーチエと共に死亡が確認されています」

「つまりだ、今のノーチエファミリーはボスの子供ではなく、戦いを仕掛けた側近の息子が仕切っている。そう言う訳だな」

さりげなく獄寺が捕捉をいれる。

「その通りです」と、オレガノがうなずいた。

「しかし、よくそんな事が出来たもんだな。ボスを殺した側近の息子が今のボスなんだろう。ファミリーの者達は誰も反対しなかったのか」

獄寺の言う事も一理ある。

「ファミリーのご家族が全て行方不明だったからでしょう。現に、その後手を尽くして探しましたが、見つからなかったと言います。そのファミリーの部下が日本のここ並盛町に来ていまして、どうやら私達が探している人物と同じ人物を探しているみたいなのです」

「そつか。二人がここに来たのは人探しのためだったんだね」

「すみません、沢田殿」そう言ってバジルは頭を下げた。

「人を探すだけでしたので皆さんの手を煩わせたくなかったのです」

「それで、バジル君達が探している人って、どんな人なの？」

「皆さん方と同じ年代の女の子です」オレガノが話を続けた。

「私とバジルは彼女を見つけて保護するためにここに来ました。ただ、緑中にいる事まではわかっているのですが、その先が進んでいないのです」

そう言うと、手帳に挟んであった写真を取り出した。

写真には二人の人物が写っている。ひとりには初老の男性、もうひとりには銀色の長い髪が美しい少女だった。

着ている服からこの二人が裕福な家の人達だと言う事がわかる。

「彼女の名前はダフネと言います。しかし、ここ一週間程緑中で調査をしたのですがまだ見つかっていないのです。もしかしたらもうここにはいないのかと思ったのですが、ノーチェファミリーが私達と同じ目的でここにいる以上、それはないと思います」

「昨日俺達が戦ったあの並中の制服を着た奴らもそのファミリーの一員なのか？」と、獄寺。

「それはわかりませんが、間違いないと思います」

「どちらにしても、また会う事には変わりないだろうな。それで、門外顧問組織が彼女を保護する理由って一体何だ」

「十年前、彼女を保護したファミリーが彼女によって全滅したからです。そして、これが最も重要なのですが、彼女がノーチェファミリーのボスであったダリーオ・ノーチェの一人娘だと言う事がわかったのです」



家光からの連絡でオレガノが一番驚いた事だった。同時に、人探しから始まったこの調査がおおことになり始めていると言う事もわかって来た。

「今のノーチエファミリーでは彼女の存在は邪魔でしかないのでは？」

「バジルの言う事も最もだな」

リボーンがうなずいた「今のファミリーのボスは青ひげの息子だからな。そこに彼女がこのこやって来たらまた何が起こるかわからない。ファミリー分裂の危機だけは避けたいところだろうな」

「それについてもしかして、ダフネ、だっけ、彼女が狙われているって事？」

「ツナにしては珍しく鋭いな」

と、リボーンが感心している。

「だからお前達にも手伝ってほしいんだ。さっきも言った様にすでにボンゴレファミリーの者が傘下の者も含めて巻き込まれている。このまま黙っている訳にもいかないからな」

「俺はかまわないよ。なぎなたを切った事を謝らないといけないからな」

今まで黙っていた山本が言う。

獄寺も黙ってうなずいた。

「でも、手伝うって言うっても俺達何をすればいいの？」

ツナの言葉にリボーンは言った。

「いつも通り動いてほしい、それだけだ。早く言えば囧だな。特にツナ、お前はボンゴレの十代目だ。向こうにとってはかなりいい囧になるぞ」

「俺は囧なの」

半ば渋い顔のツナとは対照的に獄寺、山本は嬉しそうだ。

「大丈夫です、十代目。俺と言う右腕がついていますから」

「俺もいるしな」

「山本、くれぐれも十代目の足を引っ張るんじゃないぞ」

半ば睨み付けている獄寺と何事もなく微笑みかけている山本の二人を見ながらオレガノがバジルの方を向いた。

「私は緑中での搜索を引き続き行います、バジルあなたも並盛中での調査をお願いね」

「わかりました」こつくりとバジルがうなずいた。

「それじゃあ、この話はここでおしまいだな」

と、リボーンがこの場を締め括った。

## 合唱部

学校を休んだ次の日、まだ痛む肩に氣を使いながらバジルと共に緑中への道をオレガノは歩いていった。

バジルと一緒にいたのはオレガノのためだった。怪我をしている彼女にいつまたあの二人が襲いかかって来るかわからない。バジルには遠回りになるからと言って断ったのだが、バジルの「自分の足には自身があるから大丈夫です」との一言で結局、ついていってもらった。う事にしたのだ。

「帰りにはまた迎えに来ます。それまで動かないで待っていて下さい」

オレガノを心配して言うバジルはまるで子供を心配している親のようだ。

そんなバジルに苦笑しながらも、オレガノはうなずいた。

その二人に、ハルが声をかけて来た。

「おはようございます。オレガノ先生、怪我は大丈夫ですか？」

「ありがとうございます。昨日はお休みしてご免なさいね」

「大丈夫です。でもみんな先生の授業が聞けなくて残念がっていました。先生の授業面白いからみんな楽しみにしているんですよ」

「ありがとう。そう言ってくれると嬉しいわ」

「それでは、拙者はこれで失礼します」

一礼をして行こうとするバジルをハルが引き止めた。心なしか怒っている様に見える。

「バジルさん、大事なお姉さんを怪我させてはいけませんよ」

「すみません、拙者も反省しています」

そう言つてハルに頭を下げる。それからオレガノに近づくと、小声で耳打ちした。

「すみません、昨日学校に連絡を入れた時、理由を聞かれまして。それで、咄嗟に拙者が兄弟喧嘩をして怪我をさせたと言つたのです」

「そうだったの」同じく小声でオレガノはうなずいた。

「それはかわいい兄弟喧嘩ね」

バジルと喧嘩している様子を想像しながら、もし本気で喧嘩したらこの位の怪我ですむかしら？そう思いながらオレガノは小さく笑つた。

放課後、バジルに言われた通り、オレガノは校門前でバジルを待っていた。

思えば、放課後こうやってゆっくりとした事はなかった。いつも校内の調査で忙しかったからだろう。

校門前にいると、色々な声が聞こえて来る。

体育館の方からバレー部が練習しているのか、元気な掛け声が聞こえて来る。

校庭で走っているのは陸上部か、ソフトボール部だろうか。

校舎の方を見ると、色々な楽器の音色がバラバラに聞こえて来る。その中で、聞き覚えのあるあの歌声が聞こえて来たのだ。

「この声…」

あの夜、黒曜ランドで聞いた声と同じだった。

声のする所を探すため、オレガノは校門を離れ、校舎へと向かった。歌声のする方へ向かって校舎をゆっくりと歩いて行く。歩いて行くうちに、その歌声は他の歌声と交ざって行った。

校舎を見上げると、その歌声は上から聞こえて来る。

オレガノの記憶に間違いなければ、あそこは音楽室がある。おそらく、合唱部が使っているのだろう。

バジルはそのまま待たせておこう、そう思ったオレガノは校舎の中へと入って行った。

校舎を上がり、音楽室の前に来ると、校門前で聞いた時より美しく、迫力のある歌声が聞こえて来た。

開きっぱなしの扉から二十人程の女子生徒が一心不乱に歌を歌っているのが見える。

ピアノの側には長い髪をゴムでまとめた小柄な女性が生徒達に檄を飛ばしている。

音楽の教師であり、合唱部顧問の黒岩だった。オレガノ自身、職員

室で何度か見ているものの、あまり話した事はなかった。

「そこ、もっと口を大きく開けて」

歌声に負けない位の大声で黒岩が生徒達に注意をしている。

「アルト音程がはずれてる。そこはリズムが違う」

黒岩の檄が飛ぶたび、歌声が少しずつきれいに、透明になっていく。

どの位、そうしていただろうか。

ひと通り歌い終わると、黒岩が休憩を入れた。

それを合図に女子生徒達がほっとした顔でおしゃべりを始める。黒岩がひと息ついているのを確認してオレガノは声をかけた。

「お疲れ様です」

声をかけたオレガノに黒岩が険しい眼差しを向ける。

「オレガノ先生、すみません。こちらにいらしたのは知っていたのですが、指導中だったものですから」

口では謝っているものの、どこことなく警戒している様に見える。そんな黒岩にオレガノは言った。

「こちらこそ、練習の邪魔をして申し訳ありません。校門前にいました所、美しい歌声が聞こえてきまして、どこから聞こえて来るんだろうと校舎中を探してしまいました。」

「ご迷惑をおかけしましたでしょうか」

「いえ、そんな事はありません」

オレガノのその言葉でほんの少し警戒を緩めたようだ。

「合唱コンクールが近いものですから、少しピリピリしてまして。毎年上位に入っている学校ですから、プレッシャーもかなりのものなのですよ」

「そうでしたか。そうとは知らずお邪魔してすみません。」

それにしても、本当に美しい歌声ですね。特に、ソロパートの所は聞き惚れてしまいました。私は校門の所にいましたが、歌声はそこまで聞こえていました」

「そう言って頂けると彼女もきっと喜んでくれるでしょう」

そう言うのと、いとおしそうな顔でおしゃべりに花を咲かせている生徒達の方を見た。

「ここまで来るのに十年かかりました。今でこそ地区大会の上位校と言われていますけど、始めの頃はなかなか人が集まらなくて大会に出る事すら叶わなかったのですよ」

「やめようとは思わなかったのですか」

「何度も思いました」オレガノの問いに黒岩は小さく笑った。

「でも、合唱部を始めた事を後悔した事はありませんでしたよ」

そんな黒岩を見てオレガノはこの一回り小さく、一回り年上の彼女を素敵だと思った。

「とても素敵です。黒岩先生」

「たいした事はしていませんよ。さて、そろそろ練習に入りたいのですが、良かつたら少し見学をしていけますか？」

「ありがとうございます。それでは、お言葉に甘えさせていただきます」

それから二時間後、オレガノが校門へと戻ると、いつ来たのかバジルが待っていた。並盛中の制服をそのまま着ている所を見ると、学校を出てからそのままここに来たらしい。

「お帰りなさい。お仕事ご苦労様です」

「お疲れ様です、バジル。随分待ったでしょう」

「いいえ、そんなには」そう言うものの、学校が終わってそのまま来たバジルに対し、オレガノは合唱部の練習を見学して遅くなっている。

かなり待っているはずだった。

「先日、黒曜ランドで見た緑中の制服の少女の手がかりが見つかりそうなのです」

「本当ですか」

オレガノがうなずいた「合唱部で彼女に似た少女の声を聞きまして。バジルのほうはいかがですか」



「こちらは何の収穫もなしです。学校の中をあちこち調べたのですが、なかなかそれらしい人物が見つからなくて」

「並盛中の学生ではないのでしょうか」

向こうも警戒して出てこないのだろうか、あるいは、制服を着ているからと言ってその学校の生徒ではないとも考えられる。

「向こうも様子を見ているかもしれませんが。こちらもう少し調査を続けましょう。」

あと、明日から送り迎えはもういいですよ」

「そうもいきません。その怪我でもし襲われたらどうするつもりですか。オレガノの怪我が完治するまで拙者、送り迎えは止めませんので」

どうしても止める気はないらしい。

「本当に、頑固な所は誰に似たのかしら」

「それはお互い様でしょう」

半ば苦笑しながらバジルを見ている。

バジルはと言うと、いつも通り生真面目な顔だ。

しばらくそうしていただろうか。

仕方ないわね、と言った風情でオレガノが笑う。

バジルもまた、そんな彼女を見てようやく笑ったのだった。

## ソロパート

それからのオレガノの動きは早かった。一日のうちに合唱部の生徒達について調べあげていたのだ。

その中でも特に気になっていたのは、合唱部の華と言われたソロパートの少女だった。

その彼女は緑中一年の霞野みちる。

目鼻立ちの整った日本人離れた少女だった。

初めて見た時一年生らしくないと思ったのだが、それもそのはず、一年間病気で休んだため他の一年生より一つ年上だと言う。

もしかしたら彼女がオレガノの探している少女なのだろうか。

確証はないものの、可能性としては一番高い。

それから毎日、合唱部を見学する日々が始まった。

初めはただ見学だけだったのだが、そのうち、黒岩に頼まれてピアノの楽譜をめくったり、オレガノがピアノを弾けるとわかるとコンクール課題曲を弾いてもらう様頼まれたりしているうち、いつの間にか合唱部の中に溶け込んでいった。

数日たった日の夕方、練習が終わって喉を潤すキャンディを配っていたオレガノに黒岩が声をかけて来た。

「今度の日曜日は空いていますか」

日曜日と言えば合唱コンクール当日である。オレガノはその事を黒岩から聞いていた。

「合唱コンクール当日ですね。私の方は空いています」

「良かったら、一緒に行っていたただけじゃないでしょうか。生徒達の引率のお手伝いをお願いしたいのです。」

断る理由は何もなかった。

「私でお役に立てるのであれば喜んでお手伝いさせていただきます」  
とたんに、回りの生徒達から歓声があがった。

「オレガノ先生も来てくれるんですか？」

「やったあ、もつと先生と話がしたかったの」

「先生、お昼一緒にどうですか」

「静かにしなさい。オレガノ先生が困っているでしょう」

騒いでいる生徒達を黒岩がたしなめる。

「場所はこの緑中の音楽室。ここで少し練習をしてから並盛町民ホールに行く事になっています。時間は八時と言う事でよろしいかしら」

「わかりました。大丈夫です」

「それでは、よろしくお願いします」

そう言うに残っている生徒達に早く帰る様言い残して黒岩は音楽室を出ていった。

オレガノもまた、残っている生徒達に早く帰る様に促し、音楽室を出た。

職員室で荷物を取りに寄り、校門に来ると、いつも通り待っていたバジルの他に、二人の女子生徒が待っていた。

「オレガノ先生、お疲れ様です」

そう言うて手を振ったのはハルだった。そしてもうひとり、ハルの後ろで頭を下げたのは、さっきまで合唱の練習をしていた霞野みちるだった。

意外だった。今まで彼女とは事務的な話以外した事がなかったからだ。

そんな内心の驚きを隠しながら、オレガノはさり気なく言った。

「霞野さん、今日はお疲れ様でした。ハルさん、今日のテストはいかがでしたか」

「はひっ、ばっちりですっ」

満面の笑みでハルがうなずいた。「昨日、ツナさん達といっぱい勉強しましたから」

中間テスト当日、数人がインフルエンザで休んでしまい、その休んだ人達のテストを今日の放課後やっていたのだ。

ハルもその中のひとりである。

「ツナさんと山本さんは大丈夫でしょうか」

「大丈夫です」バジルがうなずいて言う。「昨日あれほど皆さんで教えていたではないですか」

バジルの話によると、ツナと山本が中間テストで赤点を取ってしまったため、追試となってしまった二人のためにツナの家でテスト勉強をしていたのだと言う。

「後は運を天に任せましょう」

そう言うてにつこり笑うバジルにハルもまたにつこりと笑い返した。

「そうですね。ハル達は一生懸命やりました。バジルさんの言う通り後は運を天に任せましょう」

そう言うと、ゆっくりと歩き出した。

ハルとバジルが楽しそうに話しながら歩くのを見ながら後ろで歩いていると、いつの間にかオレガノの横にみちるが並んで歩いていた。

そのまま、歩道を一緒に歩いて行く。

どの位歩いたのだろうか、不意に、みちるのよく通る声が聞こえて来た。

「先生はどうしてこの学校に来たのですか？」

その声に、オレガノがみちるを見ると、彼女はオレガノをじっと見

つめていた。

「この学校のイタリア語の先生が急用でイタリアに帰ったため、私が臨時の講師で入りました」

「それだけですか？」

みちるの、真っ直ぐな瞳がオレガノを見つめている。

そんな彼女に、オレガノは優しく微笑んだ。

「私は、この学校でいろんな事を学んで来ました。ここへ来て、ここで過ごして私は生徒達からたくさん事を教えてもらいましたし、他の先生からもたくさん事を教えていただきました。」

もしかしたら、こうした事を教えてもらうために私はここに来たのかもしれない」

オレガノにとって、嘘偽りない言葉だった。人探しのために潜入したこの緑中でたくさん事を学んだのだ。

オレガノのこの言葉に納得したのか、それ以上みちるは何も聞いて来なかった。

道はやがて交差点へと差し掛かった。

「それでは、私はここで失礼します」

交差点の角でみちるは頭を下げた。どうやら彼女の家は交差点を渡った先にあるらしい。

「今日はありがとうございました。先生の話が聞けてとても楽しか

ったです」

「こちらこそ。気をつけて帰るのですよ」

もう一度、みちるが頭を下げた。その彼女にバジルは軽く会釈を返し、ハルは大きく手を振った。

## 合宿コンクール

日曜日、八時少し前に音楽室に入ると、黒岩がピアノの前に座って待っていた。

他の生徒達の姿はまだない。

「おはようございます。他の生徒さんがまだ見えていない様ですね」

「二人きりで話をしたくて今日は少し早めに来てもらいました。ご迷惑でなければ少しお話をしてよろしいでしょうか」

オレガノがうなずくと、黒岩は立ち上がってオレガノの前へと近づいて来た。

「あなたになら本当の事を話しても良いと思ひまして。ですから、あなたも本当の事を話していただけないでしょうか。」  
ボンゴレファミリーのオレガノ先生」

黒岩がにっこりと微笑んだ。

あまりにもさり気ない黒岩の言葉に、オレガノは初め、何を言われたのか理解出来なかった。

しばらく考えてようやくと理解したオレガノは口を開いた。

「いつ頃から気がついていたのですか」

「先生がこの学校に来た時からです。初めは警戒していたのですが、先生みんなに対する接し方や、みちるからの話を聞いてもしかし



たら信用出来る人ではないかと思ったのです。

私も、以前はスペインのファミリーにいましたからこう見えても人を見る目はあるつもりなのですよ」

初めの頃感じていたあの警戒心はどうやらこれだったらしい。

それにしても、とオレガノは思う。

この学校に来る前にここの教師の素性は一通り見ておいたつもりだった。

そしてオレガノ自身、自分の素性を隠していた動いていたはずだった。

まさか目の前の彼女が自分の素性を知っているとは思ってもみなかったのだ。

「そこまでご存知でしたのなら、話さない訳にはいかないのでしょうね。

わかりました。お話いたします」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4010x/>

---

銀の月と銅の星

2011年12月27日22時52分発行